

博 多 83

—博多遺跡群第127次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第709集

2002

福岡市教育委員会

はか
博
た
多
83

— 博多遺跡群第127次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第709集



調査番号 0053
遺跡略号 HKT-127

2002

福岡市教育委員会

序

商業都市福岡は、その形成に長い歴史の道筋をたどって今に至っています。そのなかで、中心的な役割を果してきた地域が博多です。

博多はこんにちもなおその活動を続けており、その結果、地下に残る過去の活動の跡が埋蔵文化財として日の目を見ることになりました。福岡市教育委員会では、工事によりやむなく破壊される埋蔵文化財については、記録による保存を図ることとし、博多遺跡群についての発掘調査を継続してまいりました。博多第127次調査もそのひとつであり、本書においてその成果を公刊することとなりました。ここに至るまでには、黒川九彌氏ならびに黒川浩純氏をはじめとする関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

また、本書が、博多遺跡群についての理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

はじめに

- 1 本書は、2000年度(平成12年度)、福岡市博多区冷泉町41-1,41-2,41-3において、福岡市教育委員会がおこなった、博多遺跡群第127次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、文化財保護法57条の2に基づく届出を受け、黒川九彌氏から福岡市教育委員会が業務を受託し、文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査にあたっては、黒川浩純氏、上村建設を中心とした関係者各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げる。
- 3 発掘調査・整理報告は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課杉山富雄が担当した。遺物実測、遺構実測図・遺物実測図等は大浜奈緒が行った。
- 4 出土資料・調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理し利用に供する予定である。

凡 例

- 1 位置の記述には、「博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿(1992)」の成果を利用した。
- 2 報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業を通して付した登録番号を使用する。
- 3 図中に用いる方位は、国土地理院の座標北であり、真北から0度19分西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺3分の1で図示する。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。
- 5 本文中陶磁器の分類表記は下記によった。
横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』〔Dで表記〕
中形・大形の陶器については
森本朝子 1984 「博多出土貿易陶磁器分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集〔Hで表記〕

遺跡調査番号	0 0 5 3		遺 跡 略 号	H K T - 127
調査地地番	福岡市博多区冷泉町41-1,41-2,41-3		分布地図番号	49(天神)
工事面積	327m ²	調査対象面積	164m ²	
調査実施面積	185m ²	調査期間	2000年12月4日～2001年2月9日	

本文目次

I 博多遺跡群第127次調査の経過と概要	
1 発掘調査に至る経過	1
埋蔵文化財事前審査	
発掘調査	
2 発掘調査地点の立地と周辺の調査	1
調査地点の立地	
周辺での調査	
3 発掘調査の経過と調査成果の概要	
発掘調査の経過	3
発掘調査成果の概要	3
II 発掘調査の成果	
1 第1面出土の遺構と遺物	7
土壙8	7
土壙9	8
土壙15	9
土壙19	10
土壙23	10
土壙24	11
土壙26	13
土壙35	14
土壙37	14
土壙42	15
土壙52	16
土壙89	17
遺構99	18
土壙100	21
土壙123	24
土壙124	24
2 第2面出土の遺構と遺物	
溝55	25
小穴62	27
小穴64	28
井戸78	29
溝80	29
遺構84	31
溝85	31
土壙111	31
土壙127	33
土壙128	34
土壙131	34
井戸133	35
3 墨書き器	36
III おわりに	38

挿図目次

図 1 博多遺跡の位置 (1:50,000)	1
図 2 第127次調査地点の位置 (1:5,000)	1
図 3 1 区 1面全景 (北西から)	2
図 4 2 区 1面全景 (南東から)	2
図 5 1 面の遺構と土層 (1/200)	4
図 6 2 面の遺構と土層 (1/200)	5
図 7 1 区 2面(北半部)全景 (北西から)	6
図 8 1 区 2面(南半部)全景 (北西から)	6
図 9 2 区 2面全景 (南東から)	6
図10 土壌 8 (1/40)	6
図11 土壌 8 出土遺物 (1/3)	7
図12 土壌 9 (1/40)	8
図13 土壌 9 (南から)	8
図14 土壌 9 出土遺物 (1/3)	9
図15 土壌15 (1/40)	9
図16 土壌15出土遺物 (1/3)	10
図17 土壌19 (1/40)	10
図18 土壌19出土遺物 (1/3)	10
図19 土壌23 (1/20)	10
図20 土壌23出土遺物 (1/3)	10
図21 土壌23 (南から)	11
図22 土壌24 (1/20)	11
図23 土壌24 (北西から)	12
図24 土壌24 (南から)	12
図25 土壌24出土遺物 (1/3、1/4)	13
図26 土壌26 (1/40)	13
図27 土壌26 (南西から)	13
図28 土壌26出土遺物 (1/3)	14
図29 土壌35 (1/40)	14
図30 土壌35出土遺物 (1/3)	14
図31 土壌37 (南西から)	15
図32 土壌37 (1/40)	15
図33 土壌37出土遺物 (1/3)	15
図34 土壌42 (1/40)	15
図35 土壌42出土遺物 (1/3)	16
図36 土壌42 (南から)	16
図37 土壌52 (北東から)	16
図38 土壌52 (1/40)	17
図39 土壌52出土遺物 (1/3)	17
図40 土壌89 (1/40)	18
図41 土壌89 (南から)	18
図42 土壌89出土遺物 (1/3)	18
図43 遺構99実測図 (1/40)	19
図44 遺構99 (南西から)	20
図45 遺構99遺物出土状況 (南東から)	20
図46 遺構99遺物出土状況 (南東から)	20
図47 遺構99出土遺物 (1/2、1/3、4/1)	21
図48 土壌100 (1/40)	21
図49 土壌100 (東から)	22
図50 土壌100遺物出土状況 (南から)	22
図51 土壌100出土遺物 (1/2、1/3)	23
図52 土壌123・124 (1/40)	24
図53 土壌123出土遺物 (1/3)	24
図54 土壌123・124 (南から)	24
図55 溝55 (西から)	25
図56 溝55出土遺物 (1/2、1/3、1/4)	25
図57 溝55・80・85 (1/80)	26
図58 溝55出土遺物 (1/3)	27
図59 小穴62・64 (1/40)	27
図60 1 区北西部遺構 (北西から)	28
図61 小穴62出土遺物 (1/3)	28
図62 土壌64 出土遺物 (1/3)	28
図63 井戸78 (南から)	29
図64 井戸78 (1/40)	29
図65 井戸78出土遺物 (1/3)	29
図66 溝80 (北西から)	30
図67 溝85 (西から)	30
図68 1 区北壁十層断面 (1/40)	30
図69 遺構84出土遺物 (1/3)	31
図70 溝85出土遺物 (1/3)	31
図71 土壌111 (1/40)	31
図72 土壌111出土遺物 (1/3)	31
図73 土壌111 (東から)	32
図74 土壌127 (南東から)	32
図75 土壌127出土遺物 (1/3、1/4)	32
図76 土壌127 (1/40)	33
図77 土壌128 (1/40)	33
図78 土壌128・131 (北東から)	33
図79 土壌128出土遺物 (1/3)	34
図80 土壌131 (1/40)	34
図81 土壌131出土遺物 (1/3)	34
図82 遺構133 (1/40)	35
図83 遺構133 (南から)	35
図84 遺構133出土遺物 (1/3)	35
図85 墨書き土器 (1/3)	37

I 博多遺跡群第127次調査の経過と概要

1 発掘調査に至る経過

埋蔵文化財事前審査

1999年(平成11年)11月16日付けで黒川浩純氏から、博多区冷泉町41-1,41-2,41-3における共同住宅建築計画について、福岡市教育委員会に埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。埋蔵文化財課では、同年12月9日試掘調査を実施し、計画地内に埋蔵文化財を確認した。これを受けた現状での保存についての検討を行ったが、工事の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けられず、やむなく記録保存の措置を執ることとなった。

発掘調査の経過

記録保存のための発掘調査は、黒川九彌氏の委託を受けて福岡市教育委員会が実施することとなり、教育委員埋蔵文化財課が担当として、準備工事の完了をまって2001年12月4日現場作業に着手した。

発掘調査は工事の掘削が及ぶ範囲を対象とした。ここで山止め工事を先行して施工し、土砂の一部を搬出するなどの協力を受けることができた。調査は北半部(1区)から開始し、上砂の反転、山止め工事中の休止期間を挟んで南半部(2区)の調査を完了したのは、2001年2月9日である。

2 発掘調査地点の立地と周辺の調査

調査地点の立地

埋没地形の研究成果からすると、博多遺跡群が立地する砂丘列のなかで最奥部の砂丘列の稜線より北側(海側)の地点に位置する^[1]。旧状は砂丘間の低地に面した斜面であったと考えられる。現況も南側の国体道路側から博多湾側に向かう緩斜面となっている。

周辺での調査

西に10m離れて第79次地点、東に20m離れて第67次地点その東に第4次地点、国体道路を隔てた南側に第7次地点が位置している。



図1 博多遺跡の位置 (1:50,000)



図2 第127次調査地点の位置 (1:5,000)



図3 1区1面全景(北西から)



図4 2区1面全景(南東から)

第67次調査では、2面の調査を行い井戸群と溝、鐵冶跡など11世紀から14世紀にかけての遺構が検出された。溝は東に隣接する第4次調査地点でも検出されており、これをつなぐとほぼ東西方向に走ることになる^①。

第79次地点では部分的に5面、全体としては3面にわたる調査を行い、8世紀から14世紀にかけての遺構が検出された。遺構は時代を別にすれば3271基を記録している。井戸、土壤、柱穴などのほかに道路状遺構、埋葬遺構があり、一括投棄された陶磁器を含む大量の遺物が出土している。このなかには墨書き土器が多數含まれている^②。

3 発掘調査の経過と調査成果の概要

発掘調査の経過

調査は、廃土の処理や建設工事の工程との調整から、先述したように北半部を先行した(1区)。更に1区は調査による廃土置場を確保するため、途中から南半部を先にすすめ(1B区)、その後残る1区北半部調査区(1A区)の廃土を置いた。この後土砂を反転し、南半部を2区として調査した。

表土は、事業者の協力をうけて、現況地表面から1.6m程の整地層上面直上の位置まで機力により除去した。表土除去中も立ち会って土層の状況を確認したが、表層以下は全体に一様な暗褐色粘質土で遺構は確認できなかった。整地層上面を第1面の調査面とした。1A区では整地層下の黒褐色砂質の包含層を2層とし、その上面と除去後の地山面とに分けて調査を行った。地山面で検出した遺構はごく少数で2層上面に掘り込み面があるものも含まれている。

1B区では包含層がなく、遺構の重複により包含層も判然としない状態であったことから、1A区との位置関係と重複関係から下面の遺構を区分した。

2区では既存の地下室により2/3ほどが破壊されていた。それ以外は調査開始面を1面、部分的に残る2層の高さにあわせた位置を第2面、地山面を第3面として遺構を調査したが、1区同様明らかに上位の遺構とわかるものが含まれる。

発掘調査成果の概要

遺構 調査面について、調査区ごとの遺存状況から明確な面を設定できなかった。報告では調査開始面を第1面、整地層下、2層上面かそれと同じ高さで検出した遺構を第2面の遺構とし、第3面として記録した遺構も含めて第2面の遺構と取り扱う。

以上のように整理すると、記録した150件のうち、1面の遺構は土壙21、小穴12、第2面の遺構として土壤23、溝3、井戸2、小穴12がある。それ以外は不整な落ち込み、樹根状の小穴、明らかに近世以降とわかる土壤などである。

整地層とする層は1区の北寄りのみに分布し灰層、焼土塊などを含んでいるが、明確なかたちをもった広がりではなくその性格は不明である。

出土遺物 遺物は総量でコンテナ70箱ほどが出土した。出土遺物の大部分は土器類である。金属製品はごく少ない。銅鏡はトレンチ出土資料を含めても3点があるのみである。その他の銅製品、鉄製品も釘類の他は明確な製品の出土がない。石製品も砥石、石鏡などがごく少量出土したのみで、全体に占める割合がごく小さい。墨書き土器は第79次地点と同様顕著である。

【注】

(1) 碓望・下山正一ほか 1998 「第4章 博多遺跡群めぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』 pp.69-112

(2) 常松幹雄・横山邦維 1992 「博多29～博多遺跡群第53・67次発掘調査報告～」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第284集

(3) 大庭康時 1996 「博多50～博多遺跡群第79次調査の概要～」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第447集

- 1 黒褐色粘質土（粘土塊、レンズ状の灰層を含む）
 2 黒褐色粘質土（灰黃褐色粘土塊を斑状に含む）
 3 黑褐色粘質土（褐褐色）
 4 黑褐色粘質土（灰黃褐色粘土塊を斑状に含む）
 5 黑褐色粘質土（灰黃褐色粘土塊を斑状に含む）
 6 灰褐色（全体的範囲に広がって偏斜する）
 7 黑褐色（灰褐色少、上部は灰褐色？）
 8 黑褐色粘土（下部では粘土塊）：薄SS

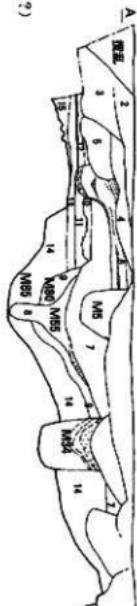


図5 1面の造構と土層 (1/200)

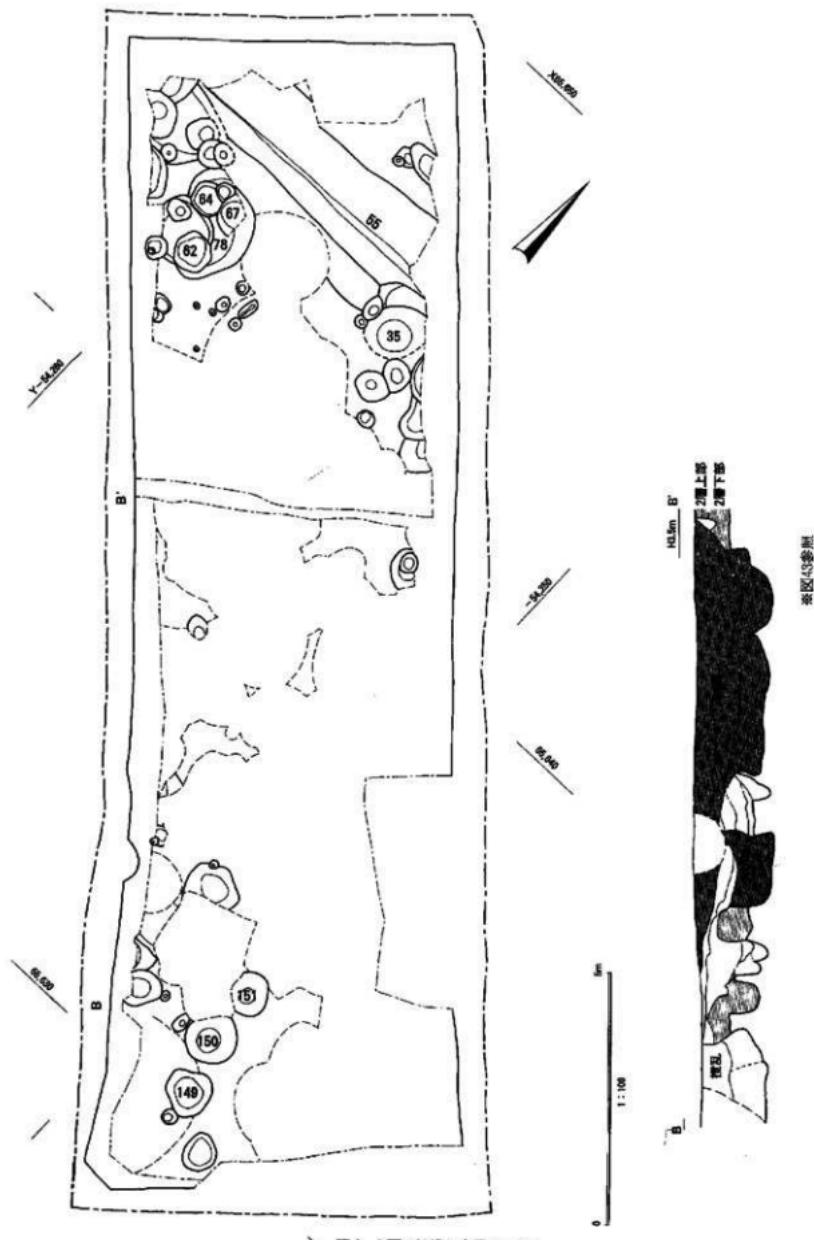


図6 2面の造構と土層 (1/200)

図7 1区2面(北半部)全景
(北西から)



図8 1区2面(南半部)全景
(北西から)



図9 2区2面全景(南東から)



II 発掘調査の成果

1 第1面出土の遺構と遺物

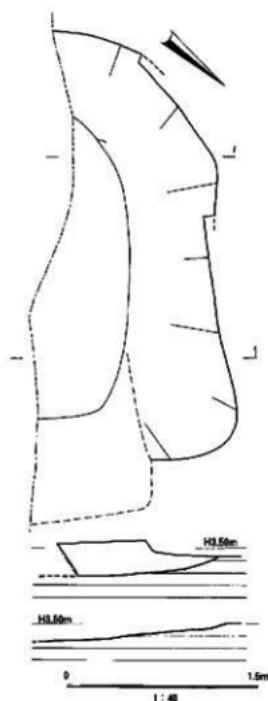


図10 土壌8 (1/40)

土壌8(図10)

1B区で検出した。不整な隅円長方形で、浅い皿状の断面を呈す土壤である。2区では、確認面を深くとったため検出できなかった。覆土は黒褐色粘質土で炭、焼土粒を含み全体に一様。長さ3.9m、幅は確認部で1.9m、深さ0.3mを測る。重複して同様の形状の遺構が複数あるようにみえる(遺構7、24)が、全体でまとまって大規模な土壤となる可能性もある。土層断面では一時に埋め立てられたようにみえ、それ自体を目的とした遺構(地盤改良、あるいは埋め立て処理目的)かもしれない。

出土遺物(図11) 遺物は覆土中から散漫に少量が出土した。多くが細片の土器で、土師器系底盤が9/10を占め、残りは白磁、青磁などの陶磁器、須恵質の容器である。

491~493は土師器系底盤で492の底面には板目が残る。法量は口径12.2~12.4cm、器高2.6~2.8cmと均一であるが、底径は7.5~9.0cmと変異が大きい。

494~495は青白磁盤、496は合子細片資料である。494は上面に印花文を施す。495は上部1/2のみ施釉する。496は底部の細片で型押しによる成形である。

303は白磁盤で底面以外の全面に施釉し、内底面に草花文を模描きする。底面に墨書が残る。「僧」か?

図示しないが銅錢57が出土した。完存し、「咸平元宝(安南)と読める。

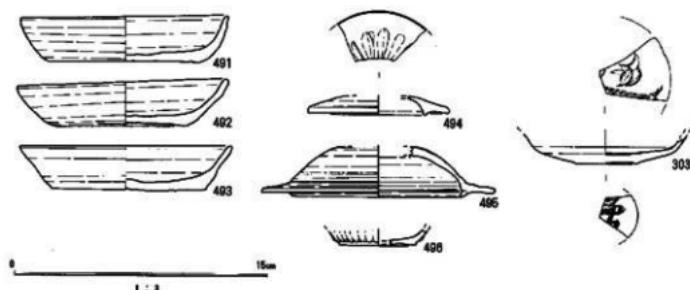


図11 土壌8出土遺物 (1/3)

土壤9(図12・13)

1 A区で検出した。不整な隅円方形の土壤である。断面は深い皿状を呈す。覆土は黒褐色の粘質土で、暗褐色砂の薄層を挟み、間欠的に埋まっていることがわかる。一辺が2.5m、深さは0.5mを測る。下半部の中央に集中して土器が投棄された状態で出土した。土師器杯皿を主に白磁碗・皿などが混じる。完形の土器が多く混じる。青磁碗・皿も含まれる。

出土遺物(図14) コンテナ2箱ほどの分量が出土した。全体の2/3が土師器杯皿類、残りのほとんどが陶磁器である。その半ばが玉緑釉を主とした白磁で、碗にD V・VII類、D V 4類がある。皿はD VII類がある。

青磁の割合は本地点の他の遺構より大きい。陶器は天目釉碗、大形容器としてH A群盤、H C群捏鉢の細片がある。石製品に磁石(溝磁石か?)、滑石製の線刻製品、球(砂岩製)がある。

瓦器皿346は、口縁部を内傾させ、細かな箇磨きを行う。径7.0cm前後、器高0.8cmを復元できる。

347~349は土師器系切底皿で、口径8.7~9.6cm、底径7.0~9.1cm、器高0.8~1.21cm、底面に板目を残す。350~352・353~357は土師器系切底杯で、口径が13.5~15.4cm、器高2.5~3.3cm、底径が9.2~11.0cmと幅がある、1例を除き底面に板目を残す。326・302・345~405は白磁皿である。

405は印花草魚文を内底面にもち復元底径16.0cm。326は内底面に櫛描きの花文をもち、外底面に墨書が残る(D III類)。墨書は花押か。345の底面には毛描きの花文がある(D

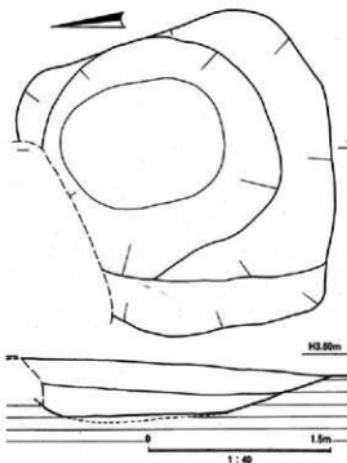


図12 土壌9(1/40)

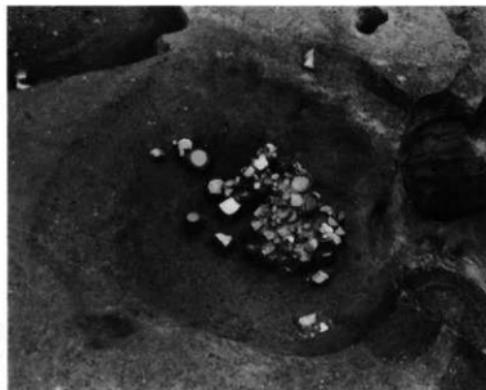


図13 土壌9(南から)

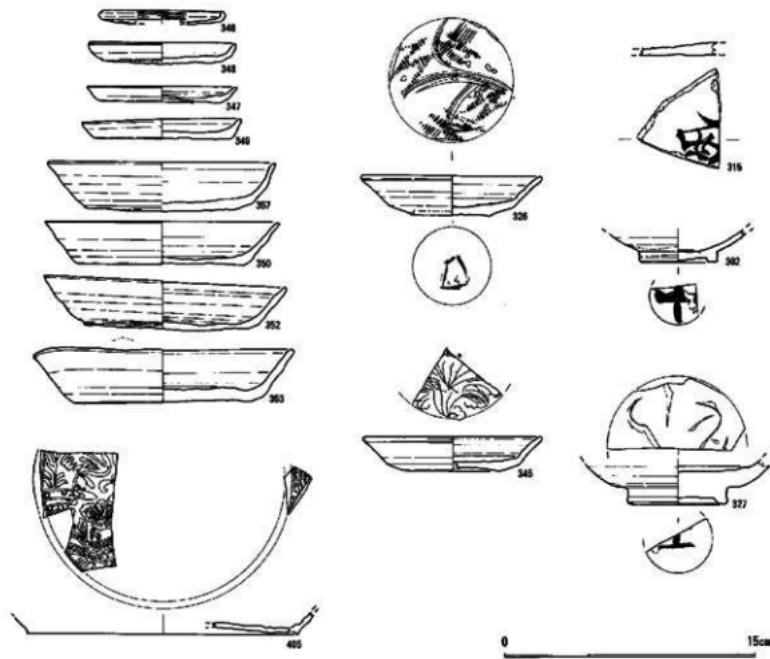


図14 土壤9出土遺物(1/3)

III類)。302の底面の墨書は「十」か。315は土師器系切底壺底部に残る墨書で、「西」か。327は龍泉窯系青磁碗(D I 4類?)底部で、「王」銘?の一部が残る。

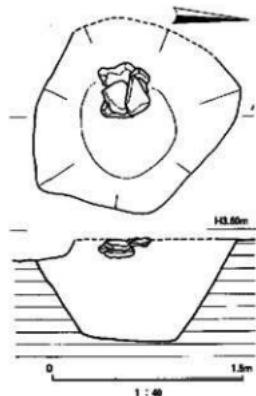


図15 土壤15(1/40)

土壤15(図15)

1 A区で検出した。不整な隅円方形の土壤で、断面は逆台形状を呈す。確認面近くの上部に偏平な跡が一括して置かれている。覆土は黒褐色砂質土で全体に一樣である。一边1.5m、深さ0.8mを測る。

出土遺物(図16) 遺物は土師器壺皿を主にコンテナ1/10ほどが出土した。白磁玉縁碗のはかに同安窯系青磁、捏鉢、壺、甕などの陶器細片、須恵器高台壺が含まれる。

498は土師器系切底皿、499・500は土師器系切底壺である。498は底部に板目が残る。口径9.0cm、器高1.2cm、底径7.0cm、499・500は口径12.8×13.4cm、底径8.5×10.2cm、器高2.3×2.7cmである。

497は白磁碗底部で、目痕がある外底面に墨書がある(D V類)。2文字あり一方は花押かとおもわれる。

土壤19(図17)

1 A区で検出した。半ばが調査区外に位置する。開円長方形の土壤で、断面は2段の逆台形状を呈すが、下半部は重複して古い遺構の可能性がある。覆土は黒褐色の粘質土で、焼土粒を顕著に含む。現況で長さ1.6m、幅1.5m、深さ0.6mを測る。

出土遺物(図18)

遺物は覆土中から密に出土し、総量でコンテナ2/3ほどの分量となる。その1/2が土師器坏皿で大部分が細片資料、笠切底と糸切底の資料がある。残りが陶磁器である。陶磁器の2/3が小形の磁器で、大部分が玉縁碗を主とする白磁である。残りが陶器大形容器である。

502・503は土師器糸切底皿で、底面に板目を残す。口径9.0・9.6cm、底径7.4・7.8cm、器高1.2・1.4cm。

501は玉縁の白磁皿で、口径9.5cm、底径4.0cm、器高3.0cm。高台近くまで施釉される(D III類)。

土壤23(図19・21)

1 A区で検出した。土壤24と重複して下位に、土壤26と重複して上位にある。位置関係からすると土壤26を併せた遺構の一部かもしれない。平面形は不整な梢円形状で、断面は漏斗状を呈す。底部の一段深い部分で土壤26に重なる。長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。覆土は上部が暗褐色粘質土、下部では灰を主として軟質となる。

出土遺物(図20)

遺物は総量でコンテナ1/10ほどの分量となる。4/5が糸切底の土師器坏皿ではほとんどが細片の資料である。陶磁器もすべて細片で白磁の他に同安窯系青磁、龍泉窯系青磁が混じる。東播系捏鉢、古代の須恵器が痕跡程度の分量混じる。

534・535は土師器糸切底皿で口径9.2・9.0cm、底径7.2cm、器高、

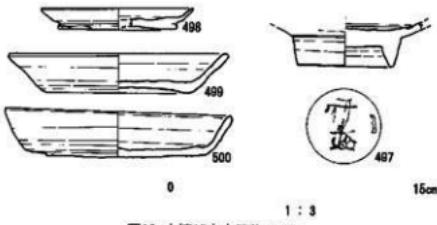


図18 土壤15出土遺物 (1/3)

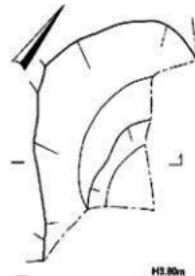


図17 土壤19 (1/40)

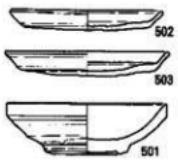


図18 土壤19出土遺物 (1/3)

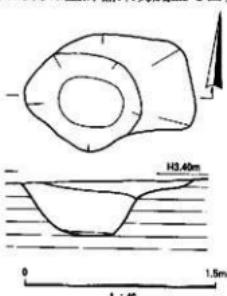


図19 土壤23 (1/20)

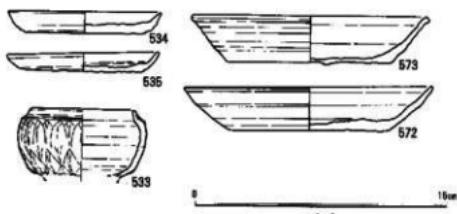


図20 土壤23出土遺物 (1/3)

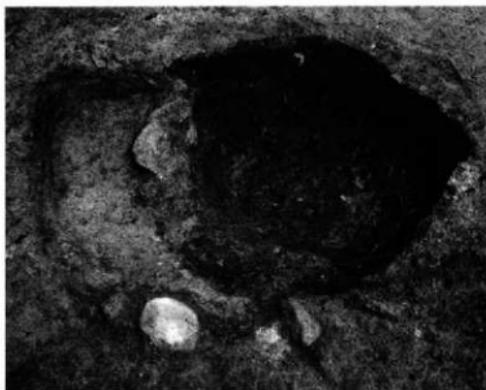


図21 土壌23(南から)

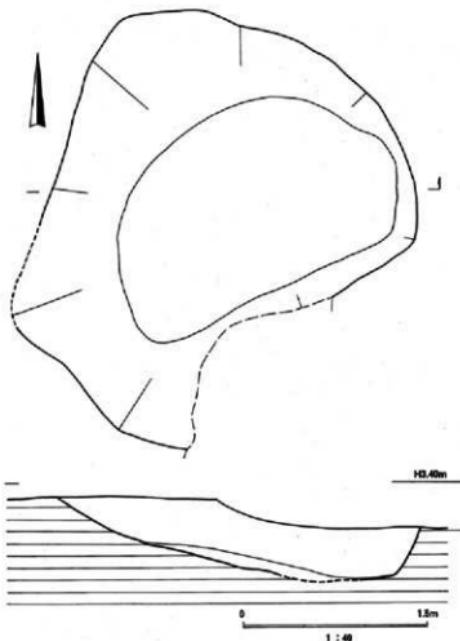


図22 土壌24(1/20)

1.3・1.2cm、底面に板目を残す。

573・572は土師器系切底皿で、口径14.2・15.0cm、底径10.0・9.5cm、器高2.8・2.7cm、底面に板目を残す。

533は青白磁合子で、体部の全体に印花連文をもち、内外面に施釉する。

土壌24(図22～24)

1B区・2区で検出した。不整な円形状の土壌。底面も不整で、南側に寄って深い。覆土は黒褐色の粘質土である。径3.0～3.0m、深さ0.7mを測る。

出土遺物(図25) 遺物は細片の土器を主に総量でコンテナ1箱ほどが、特に下部で多く出土した。2/3が土師器系切底皿類で大破片の資料を含む。残りの2/3が小形の陶磁器で、玉縁の碗を含む小形の白磁容器が半ば以上を占める。碗DⅧ類、皿Ⅲ類、皿Ⅱ類がある。青磁は龍泉窯系の碗DⅠ・5類、坏DⅢ・3類、小碗Ⅲ・1類がある。それ以外は陶器で中～大形、とくに中形の容器が顯著で、H A群の盤、H B群の壺、H C群の甕がある。備前系陶器も含み、比較的大きな破片資料が混じる。東播系捏鉢、瓦質擂鉢、土鍋も含まれる。このほかに、「北方系瓦」石鍋がある。

416は土師器系切底皿で口径8.5cm、底径6.2cm、器高0.8cmを測る。

435は瀬戸系陶器卸皿で口径14.4cmを復元できる。胎土は黄褐色、釉は大部分剥落する。

465は瓦器碗で口径14.0cmを復元できる。内面には丁寧に鏡磨

図24 土塊24(南から)



図23 土塊24(北西から)



きを施す。

453は天目釉碗で口径10.0cmを復元できる。

452は青磁合子蓋。

459は瓦器で筒状の口縁部、胎土は灰褐色で細礫を含み、器厚が一定しない。口径は4.8cmを復元できる。

463は土鍋口縁部で、口径25.5cm、胎土は褐色で細礫を含み、外面の口縁部端まで煤が付着する。

454は陶器捏鉢で、口径33.5cm、外面を櫛状の工具で調整する。

462は硯破片で幅8.8cm、裏面も使用したものか、凹んで墨状の黒色付着物が残る。輝緑凝灰岩製か。



図25 土壌24出土遺物 (1/3, 1/4)

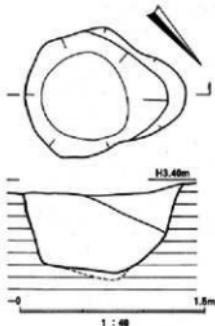


図26 土壌26 (1/40)

土壤26(図26・27)

1 A区で検出した。土壤23と重複して下位にある。平面は卵形、断面は逆台形状を呈す。長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.7mを測る。覆土は、土壤23に同じく灰層を主としてごく軟質である。

出土遺物(図28) 土器を主にコンテナ1/10ほどが出土した。土器のうち2/3が土師器系切底壺皿類である。壺底部には顯著な板目がみられるが、皿では目立たない。陶磁器は細片で端反の白磁碗、龍泉窯系青磁皿がある。石鍋破片を加工途中の資料がある。炉壁細片も混じる。

579～587は土師器系切底皿で外底面に板目が残る。法量は口径8.6～9.2cm、底径6.2～7.2cm、器高1.1～1.3cmである。588～589は土師器系切底壺で外底面に板目が残り、口径14.5～15.6cm、底径9.0～10.5cm、器高2.7～3.0cmである。

577は青白磁小形碗で高台径3.8cm。

578は青磁皿で、口径15.6cm、高台径5.5cm、器高3.8cmである。高台外面まで施釉される。疊付に目痕が4カ所残る。



図27 土壌26 (南西から)

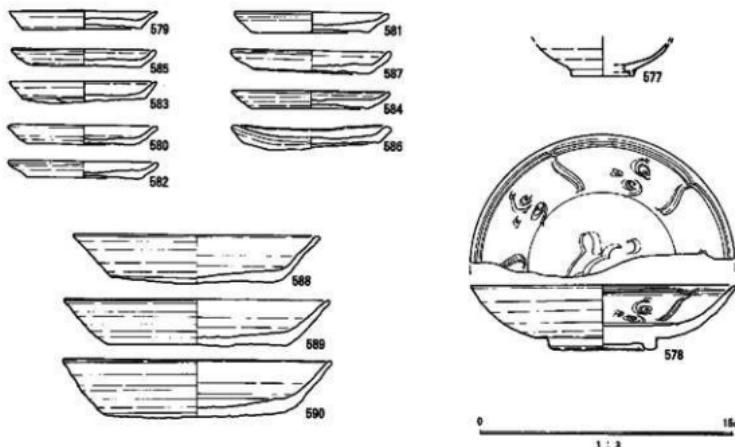


図28 土壌26出土遺物 (1/3)

土壌35(図29)

1B区で検出した。平面形が円形状、断面形が逆台形状の土壙である。調査開始面では明確にできず、2面にいたって完掘した。掘り下げの途中では平面、断面で井戸側のような痕跡を認めたが明確に検出することができなかった。覆土には灰層をレンズ状に挟んでいる。

出土遺物(図30) 遺物は、小破片の土器片を主としてコンテナ1/10ほどが出上した。石鍋の細片が顕著である(総量の1/10)。上器類のうち、土師器系切底環皿類が1/3を占め、皿に全形の遺存する資料がある。1/3は中形～大形の陶器容器、残りが小形の白磁である。小さな玉縁の碗があり、他遺構と様相を異なる。陶器では器壁の薄い壺類が顕著である。このほかに奈良時代の須恵器壺蓋がある。容器類の他に「北方系瓦」、砥石が含まれる。

319は瓦器碗である。貼付高台を欠失する。外面を笠磨きするが、内面の調整は不明確となっている。内底面には黒色の付着物がみられる。口縁径15.5cm。

土壌37(図31・32)

1B区で検出した。土壌9と重複して古い土壙である。平面形は不整な橢円形状、断面形は深い皿状を呈す。長さ2.1m、幅1.6m、深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色粘質土で、土壙9と同質であるが、夾雜物に焼土粒・塊を顕著に含む。

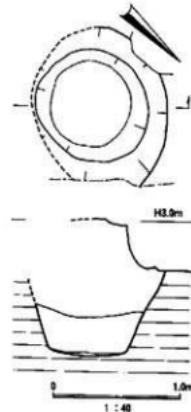


図29 土壌35 (1/40)

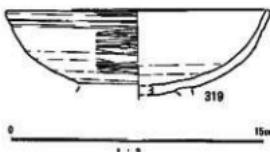


図30 土壌35出土遺物 (1/3)



図31 土壌37(南西から)

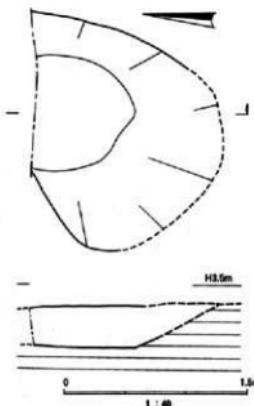


図32 土壌37(1/40)

出土遺物(図33) コンテナ1ほどが出土した。完形のまま投棄された土師器坏皿が上部から出土した他は細片の資料で、4/5を糸切底土師器坏皿が占める。陶磁器類も細片で、玉緑白磁碗のほかにごく少量の龍泉窯系青磁に碗D I - 4類がある。陶器に磁灶窯系盤、石製品に砥石があるほかに、角状の角状の土製品が出土した。

417・418は土師器糸切底皿で、外底面に板目が残り法量は口径8.5・9.3cm、底径7.2・6.8cm、器高1.1・1.2cmである。419～422は土師器糸切底坏で外底面に板目が残る。底径が異に小さい419は胎土が他の3例と異なる。法量は口径14.1～15.5cm、底径8.5～11.8cm、器高2.8～3.3cmである。

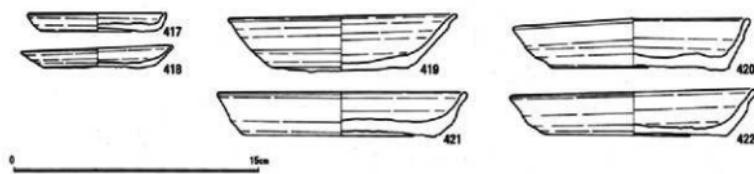


図33 土壌37出土遺物(1/3)

土壌42(図34・36)

1B区で検出した。土壌9・24と重複しているよりも古い土壌である。検出位置では残っているのはごく一部で平面形は円形状、皿状を呈す。径0.9m、深さ0.1mを測る。底面に接した位置で土師器坏皿が完形のまま一括投棄された状態で出土した。

出土遺物(図35) コンテナ1/10ほどの分量が出土したが、陶磁器は細片がごく少量あるほかは土師器糸切底坏皿である。このうち半ば以上が坏である。陶磁器は、白磁碗、龍泉窯系青磁D I - 4類碗、D I - 2類碗がある。

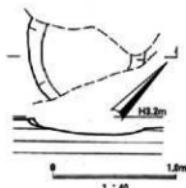


図34 土壌42(1/40)

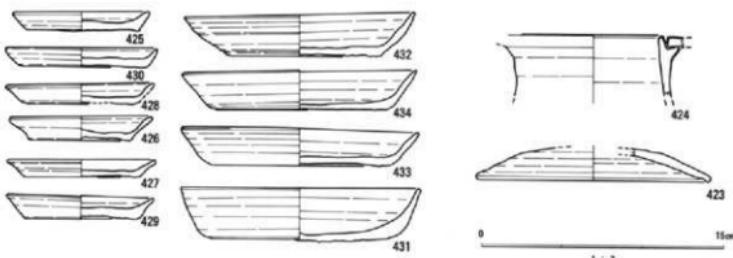


図35 土壌42出土遺物(1/3)

図36 土壌42(南から)



図37 土壌52(北東から)



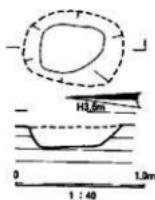


図38 土壌52(1/40)

425～430は土師器系切底皿で、外底面に板目が残り法量は口径8.2～9.3cm、底径6.3～7.4cm、器高1.1～1.5cmである。

431～434は土師器系切底环で、外底面に板目が残り法量は口径14.0～14.5cm、底径9.4～14.5cm、器高2.3～3.1cmである。

424は白磁瓶か、厚く釉がかかり、蓋部が融着している。

423は時代を異にするが、須恵器环蓋である。

土壤52(図37・38)

1A区、整地層上で検出した。土師器環皿の完形品を一括投棄する土壤である。土壤42同様、検出面では底面近くの一部が遺存するのみである。平面形は橢円の長方形、断面形は低い逆台形状を呈す。長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。

出土遺物(図39) 土師器環皿が土壤いっぱいに詰まった状態でコンテナ2/3ほどの分量出土した。ごく少量の磁器細片のはかは土師器系切底環皿で出土状況から完形品であったことがわかる。見た目では环の数が多い。陶磁器には白磁皿、龍泉窯系青磁碗D I 6類がある。

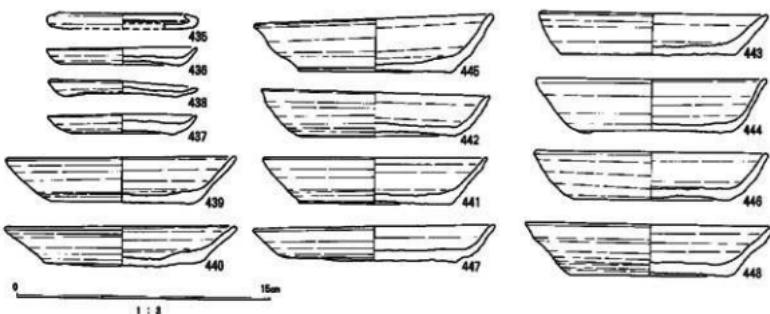


図39 土壌52出土遺物(1/3)

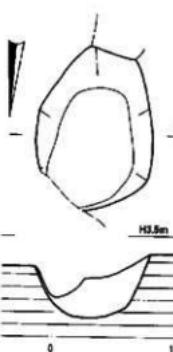


図40 土壌89(1/40)

435は皿であるが、口縁端を大きく内屈させる。外底面には指押さえの圧痕が残る。

436～438は土師器系切底皿で、法量は口径8.7～9.0cm、底径6.7～7.2cm、器高0.8～1.2cmである。板目の有無がある。439～448は土師器系切底环で、半数以上の外底面に板目が残る。法量は口径13.2～14.7cm、底径8.4～10.5cm、器高2.3～3.2cmである。

土壤89(図40・41)

2区で検出した。平面形が橢円形状、断面形がU字形の土壤である。長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。覆土は暗灰褐色粘質土で、底面近くでは灰層を挟む。

出土遺物(図39) 遺物は覆土中から散漫に出土した。細片の土器がほとんどの大形陶器の細片を多く含み、土師器底盤は磨耗した細片資料で分量も1/3ほどの割合となる。陶磁器は1/3弱で玉縁・端反の白磁碗、龍泉窯系青磁碗D I - 2類、同安窯系青磁皿D I類の細片を含む。陶器は中形から大形の容器の細片で磁窯系盤、大形壺がある。このほかに薄く網目を部分的に残す平瓦がある。

330は土師器系切底底盤で、底径10.0cm、外面の底面から体部にかけて人面の墨書きが残る。



図41 土壌89(南から)

遺構99(図43~46)

2区で検出した。平面形を確認面では明確にできないが、地山近くで確認した範囲で長さ7.2m、幅は調査区内で1.9m、深さは1.2mを測る。上部で土師器底盤の一括投棄されたような状況がみられた。覆土は、上部で黒褐色粘質土が一様に堆積し、下部では黒褐色砂層との互層、更に下位では黄褐色砂層が挟まって流水による堆積のようである。底部では、黒褐色粘質土が塊状をなしている。一括投棄された土器の細部の出土状況をみると、何枚かが重なって出土したりしており、その場に置かれたのかあるいは紐などで縛めた状態で投棄されたことが窺えるものがある。

出土遺物(図47) コンテナ2箱ほどが出土した。一括資料以外は細片を主とし、陶磁器細片を含んでいる。

357~359・381は土師器系切底盤で、法量は口径6.8~9.1cm、底径4.5~5.7cm、器高1.4~2.0cmである。板目の有無があり、器表が磨耗する個体を含む。

355・356・360~403は土師器系切底盤で、法量は口径11.8~15.8cmで12.5cm前後に集中する。底径は7.6~10.5cmで8.5cm前後に集中する。器高は2.6~3.8cmで、2.7cm前後に集中する。板目の有無があり、器表が磨耗する個体を含む。355は、口縁端を欠く資料で、内底面中央に菊花文を押す。356は体部3箇所に穿孔される。

404は須恵器甕で、外面に格子目叩き、内面は叩目を撫で消している。口縁径26.0cm。

364は小形の土鏡で長さ3.8cm、径0.8cm。

図示しないが上部から銅錢が出土した。「□寿□宝」と読める。

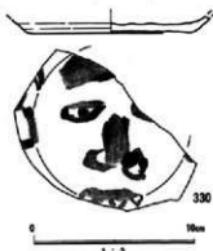


図42 土壌89出土遺物(1/3)

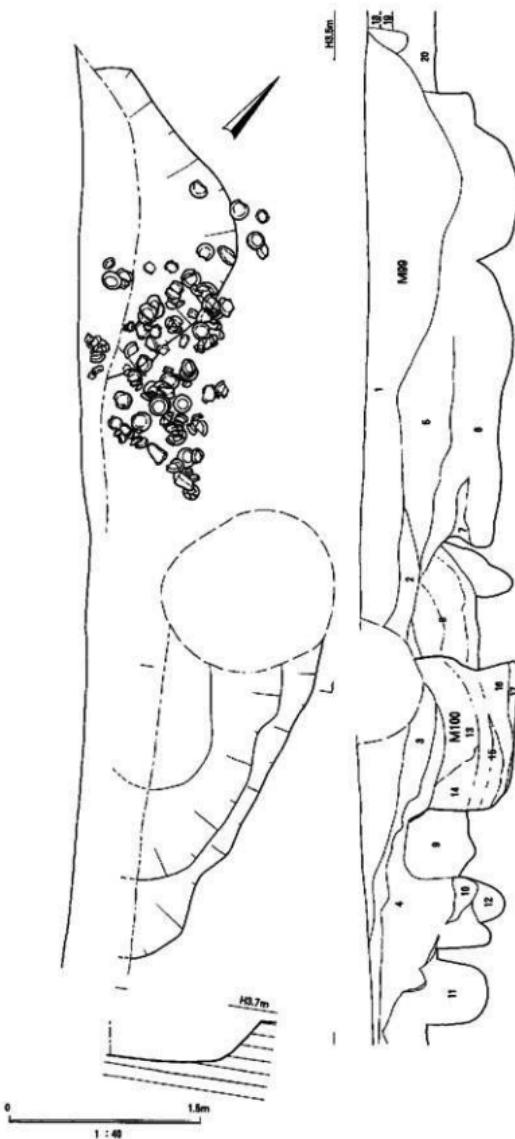


図43 造橋99実測図 (1/40)

- | | | |
|---|--------------------------|--------------------|
| 1 黒褐色粘質土 (やや塊状) | 7 暗褐色砂 | 14 黒褐色粘質土 (塊状) |
| 2 黒褐色粘質土 (灰青褐色粘土塊を含む) | 8 黑褐色粘質土 (下部では暗褐色砂層を挟む) | 15 黑褐色粘質土 (細粒) |
| 3 灰層 (黑色) | 9 暗褐色砂 (上部は黒褐色に近い): 2層 | 16 灰青褐色粘土 |
| 4 黑褐色粘質土 (ぐや塊状) | 10 灰 (塊状) | 17 黃褐色砂 |
| 5 黑褐色粘質土・黑褐色沙漏層の互層。下部に
黄褐色砂。流水による堆積? | 11 暗褐色砂: 2層 | 18 黑褐色粘質土: 2層 (上部) |
| 6 黑褐色粘質土 (塊状、上半は塊状が顯著) | 12 黑褐色砂: 上部100 (以下17層まで) | 19 灰・漬土が塊状の互層を成す。 |
| | 13 黑褐色粘質土 (塊状) 灰を含む? | 20 暗褐色砂: 2層 (下部) |

図44 遺構99(南西から)



図45 遺構99遺物出土状況(南東から)



図46 遺構99遺物出土状況(南東から)



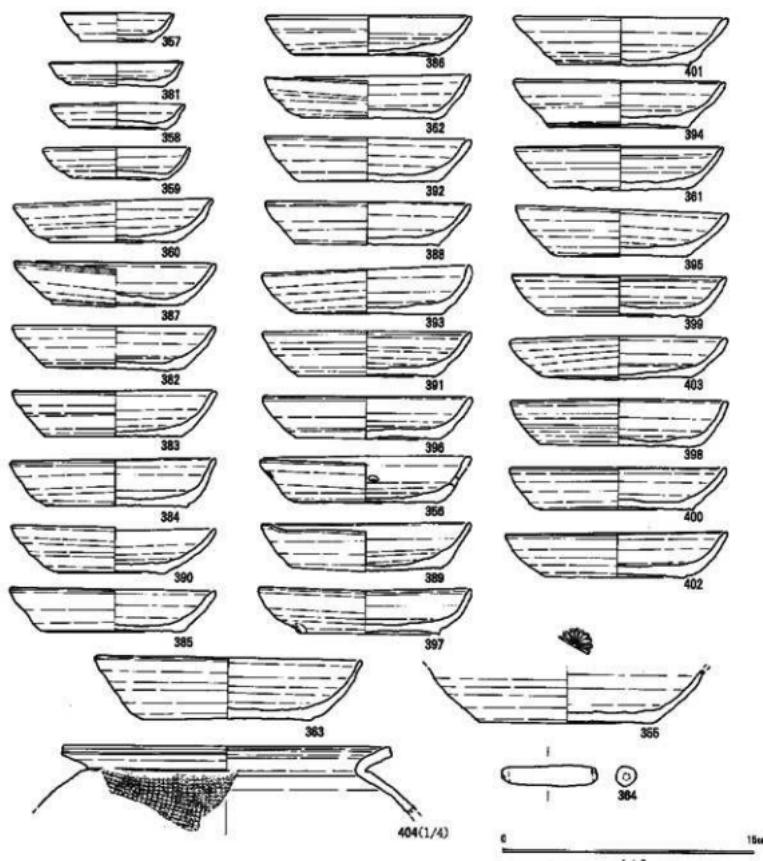


図47 遺構99出土遺物(1/2、1/3、4/1)

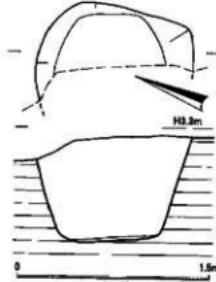


図48 土壌100(1/40)

土壤100(図48~50)

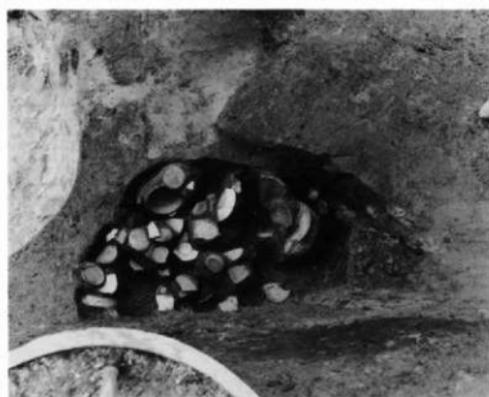
2区で検出した。平面形が不整な円形状、断面逆台形状の土壌である。半ばが調査範囲外にあるが、径1.2m、深さ0.8mを測る。覆土は黒褐色・黄褐色の粘土が間に灰層を挟みながらレンズ状に堆積している。これと覆土が同じような特徴をもった円筒状の土壌が周辺調査地点で検出されている。

出土遺物(図39) 遺物は覆土の中程から、完形のまま投棄されたような土器類が土層の傾斜に沿って出土した。ほかに破片の出土も多く、総量でコンテナ2箱ほどが出土した。土師器壊皿が総量の1/3を占める。

図49 土壇100(東から)



図50 土壇100遺物出土状況(南から)



すべて糸切底でかなりの数を接合可能とおもわれるが時間の制約上果たせなかった。陶磁器は、磁器が総量の1/3、陶器およびその他の土器が1/3を占める。磁器は少数同安窯系青磁碗D III 1類を含む他はすべて白磁で、大破片の資料も含め碗・皿がある。碗はD IV類・D V類・D VII類、皿にはD III 1類がある。陶器はすべて細片でH B群鉢、H A群盤、H C群捏鉢がある。このほかに古代の須恵器坏、古墳時代後期の土師器壺、「北方系瓦」平瓦が含まれている。

369~378は土師器糸切底皿で、板目が残る。法量は口径8.8~9.6cm、底径6.5~8.2cm、器高1.2~1.4cmである。379~409~411は土師器糸切底坏で、板目が残る。全体に大形で口径15.3~16.0cm、底径10.8~11.5cm、器高2.9~3.3cmである。

407~408は土師器高台碗の底部である。貼付高台で高台径が407が7.7cm、408が6.8cmである。

365~340~344~366~343は白磁皿である。365~340は、平底で底面以外の全面に施釉する(D VI類)。340の底面には墨書が残るが、判読できない。344も平底で底面以外の全面に施釉する。内底面外縁に篦切りで1回線を入れる(D V類?)。底面に墨書が残るが判読できない。366~343は高台付皿で、口

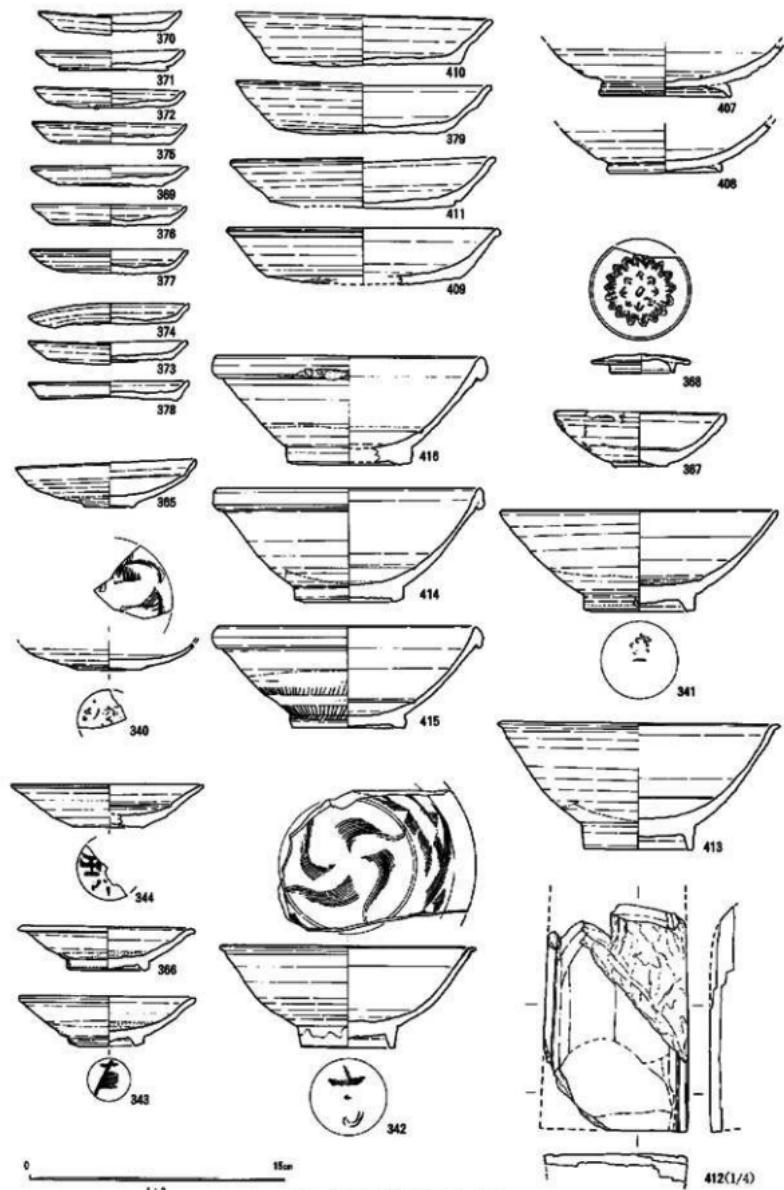


図51 土塹100出土遺物 (1/2、1/3)

縁部は外反し厚く、内底面を輪状に搔き取る(D III類)。343の底面に墨書が残る。「直」または花押か。

416・414・415・342・344・413は白磁碗である。416・414・415は玉縁碗で外面は体部上半部のみ施釉し、高台は低い。体部下半には荒い回転削りを行う。内底面に1圈線がある(D IV類)。341は内底面外縁の輪を輪状に搔き取る(D VII類)。413は端反の口縁で、外面は体部下半まで釉が及ぶ(D V類)。

368は青白磁蓋で印花文を施す。釉は上面のみにかかる。径6.0cm。

367は褐釉陶器碗である。367は底面以外の全面に施釉するがむらが著しい。

412は硯で海部を欠き、下面部分が剥落している。幅11.5cm、現存長11.5cm。

土壌123(図52・54)

2区で検出した。平面形が不整な円形状、断面逆台形状の土壌である。半ばが調査範囲外にあるが、径1.1m、深さ0.6mを測る。土壌124と接続して、遺構99の底部となる可能性もあるが、土層断面からも明確にできなかった。覆土は黒褐色粘質土。

出土遺物(図53) 覆土中からごく少量が出土した。完形の土師器系切底壺のほかは細片の土器である。同安窯系青磁皿D 1類のほかに白磁碗がある。

555・556は土師器系切底壺で、底面に板目が残る。法量は口径11.8・12.4cm、底径はともに8.0cm、器高2.5・2.9cmである。

土壌124(図52・54)

2区で検出した。平面形が不整な円形状、断面逆台形状の土壌である。半ばが調査範囲外にあるが、径1.1m、深さ0.6mを測る。土壌123と接続して、遺構99の底部となる可能性もあるが、土層断面からも明確にできなかった。覆土は黒褐色粘質土。遺物は覆土中からごく少量が出土した。

出土遺物 覆土中からごく少量が出土した。いずれも細片の土器で器表がやや磨耗する。2/3は土師器の細片、白磁端反碗、陶器、須恵器が含まれる。

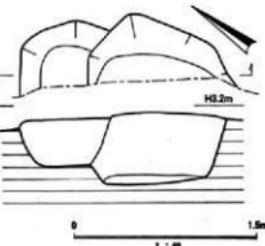


図52 土壌123・124 (1/40)

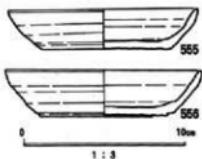


図53 土壌123出土遺物 (1/3)



図54 土壌123・124 (南から)

2 2面の遺構と遺物

溝55(図55・57)

1A区整地層下で検出した。ほぼ東西方向の溝で、後述する溝80を掘り替えたものである。断面形はY字状で、上半部が崩落しながら埋没している。調査区内では東西方向に真っ直ぐに走る。幅2.1m、深さは1.4mを測る。覆土は黒褐色シルト・粘土で、静水状態で帯水していたことを示している。特に下半部では粘土味が強くなる。また、下半部の壁が急斜な傾斜で残っていることから、短期間で埋没したことが窺われる。

出土遺物(図56・58) 遺物は覆土下部から多く出土した。総量でコンテナ1箱ほどある。全体の4/10が土師器付皿、瓦器などである。大半は土師器箋切底の皿皿で、分量からすると皿が多いが、遺存状態は皿が良好なため皿が目立つ。残りのはほとんどは土師器高台付碗で、細片～小破片の資料である。ごく少量の黑色土器が



図55 溝55(西から)

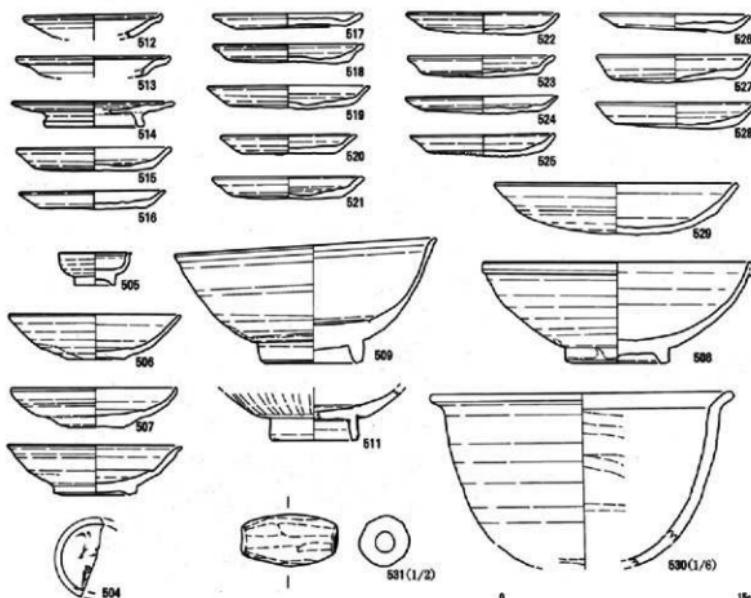


図56 溝55出土遺物(1/2、1/3、1/4)

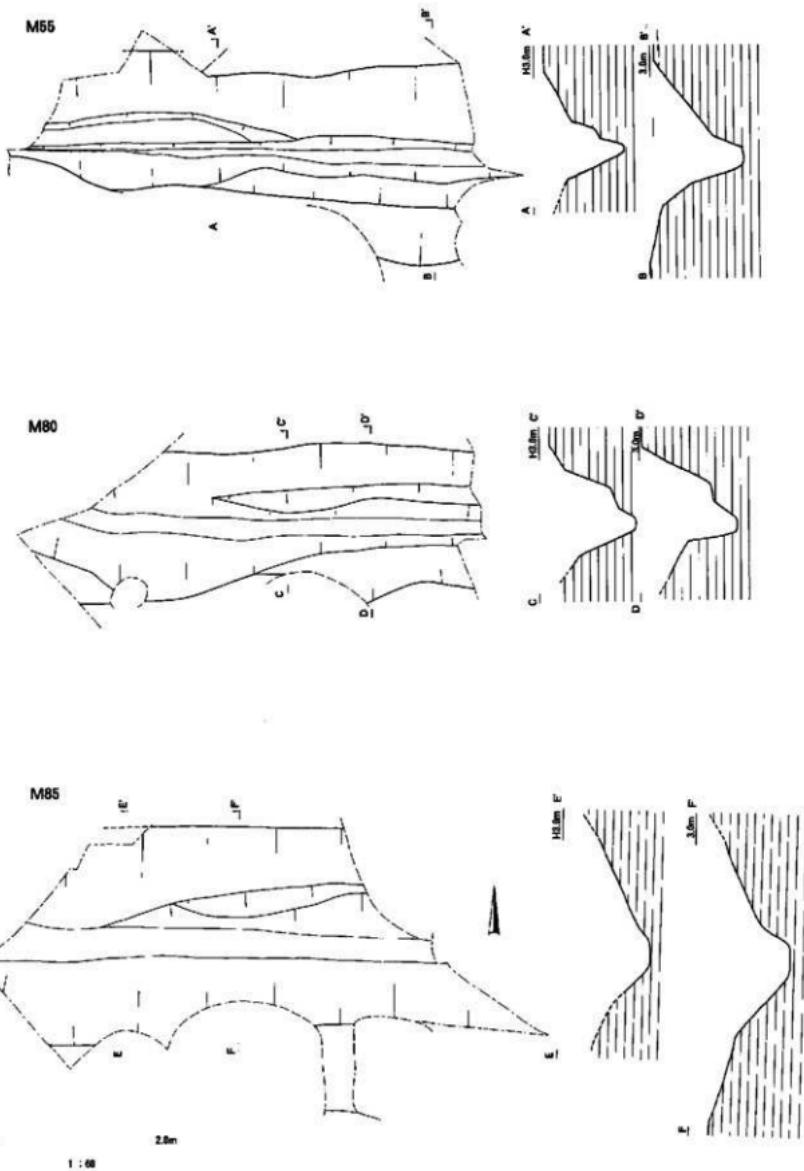


图57 满55·80·85 (1/80)

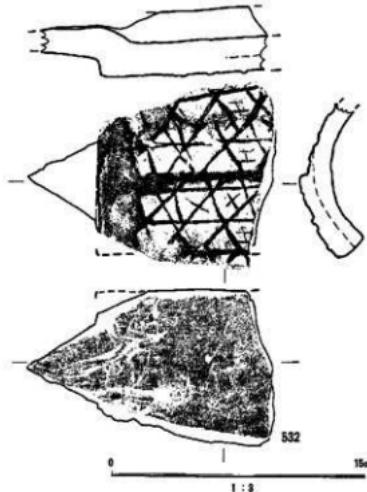


図58 溝55出土遺物(1/3)

細片で混じっている。陶磁器は総量の3/10ほどを占めるが、大半は小形の磁器容器である。玉縁の碗が多いが細片で全形を判断できる資料がない。青磁の細片があるが、胎土・釉の特徴から高麗青磁かと思われる。大形陶器も細片で出土している。残りは石製品、瓦、古代以前の土器類である。瓦は荒い叩き目をもつ。石製品には砥石などがあるが、少量である。

512・513は土師器皿で底部を欠く。口縁端部を引き上げ、体部下半は指押さえ痕がある。512は口径8.5cm、513は口径9.0cm。514は土師器高台付皿で、ごく低い皿部に高い高台を貼り付ける。口径10.0cm、高台径5.8cm、器高1.6cm。513～519・521～528は土師器盤切底皿である。515・516の他は底面に板目を残す。法量は口径8.2～10.0cm、底径5.8～7.8cm、器高1.1～1.7cmである。520は土師器糸切底皿である。外底面には板目を残す。口径8.4cm、底径5.8cm、器高1.2cm。

529は土師器丸底杯で口径15.0cm、器高3.2cm。

505は白磁小形碗で体部から高台外側まで施釉する

口径4.5cm、高台径2.5cm、器高2.1cmで、ごく小形である。

506・507・504は白磁皿である。506・507はやや上げ底状の平底で、口縁は内湾気味たちあがる。外面は体部半ばまで施釉し、一部は底部近くに及ぶ(D VI類)。504はごく低い高台を削り出す。体部内面の中位に1回線を入れる(D II類)。

509・508は白磁碗。509の口縁端部はやや肥厚し、内底面の外縁に1回線を入れる。内底面には砂粒が付着する。外面の体部下半まで施釉する(D V類)。508は、体部丸みをもち、口縁が小さな玉縁となる。高台外側まで施釉する(D II類)。

511は青磁碗底部。高台は薄く高い。高台疊付を除く全面に、緑色の透明釉を施す。胎土は灰色で空隙が顯著である。体部には蓮弁文がある。高麗青磁か。

530は土鍋とする資料で底部を欠く。体部外側は剥落し内底面の荒れが著しい。胎土に小礫を含み全体に器壁が著しく厚く1.4cmを測る。口径36.5cm。

531は土錠である。器表は荒れが著しい。紡錘状の器形に径0.8cmの孔をもつ。長さ3.8cm、径2.1cm。

532は丸瓦である。頭付で外面を荒い格子目叩きで調整する。内面には細かな布压痕が残る。胎土には、細礫を含み青灰色を呈して堅緻である。厚さ2.5cm。

土壤62(図59・61)

1A区、整地層下で検出した土壤である。平面形は不整な円形状、断面形は逆台形で径0.8m、深さ0.2mを測る。覆土は灰混りでごく軟質である。

出土遺物(図60) 遺構の規模にしては出土量が多く、コンテナ1/10ほどの分量がある。細片から小破片の資料で、土

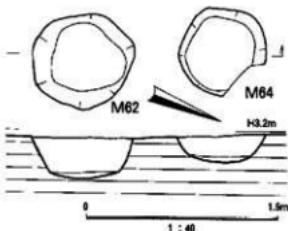


図59 小穴62・64(1/40)

師器の器表はやや磨滅する。総量の2/5は土師器坏皿である。底切り底、糸切底ともあるが、径を復元できるような資料がない。底面の板目がない(内底面の撫で調整が加わらない)資料がある。2/5は陶磁器で白磁碗のほかに同安窯系青磁がある。

537は青白磁小形壺の体部細片資料である。型造りで体部の全体に蓮弁を体部径6.1cm。

539・308は白磁碗である。539は口縁部を6等分し、白堆土を加えて輪花とする。外面は体部の2/3まで施釉する。内底面外縁に1圈線を入れ、内側を輪状に搔き取る(D VII類)。308は底部破片で外面高台近くまで施釉する。外底面に墨書が残る。「房」か。

536は白磁皿底部である。上げ底気味の平底で内底面に片彫りで花文を施文する(D VII類)。外底面に墨書が残るが判然としない。

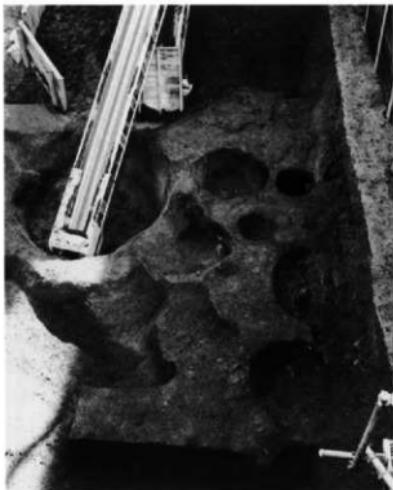


図60 1区北西部遺構(北西から)

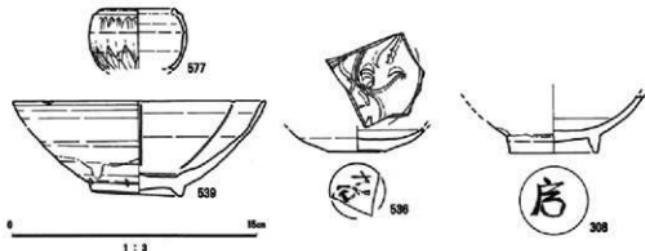


図61 小穴62出土遺物(1/3)

土壤64(図59・61)

1A区、整地層下で検出した土壤である。土壤62に近接して、形状も似ている。平面形は不整な円形状、断面形は逆台形状で径0.7m、深さ0.2mを測る。覆土は、灰層を挟む暗褐色土である。

出土遺物(図62) 陶磁器を主に少量出土した。白磁の他は細片の資料である。1/2が陶磁器で白磁が大部分を占め、同安窯系青磁が混じる。土師器は糸切底坏、高台付碗、丸底坏があるが何れも細片である。

541・540は白磁碗である。541は大きく広がる体部外面の下部

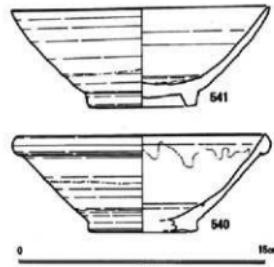


図62 土壤64 出土遺物(1/3)



図63 井戸78(南から)

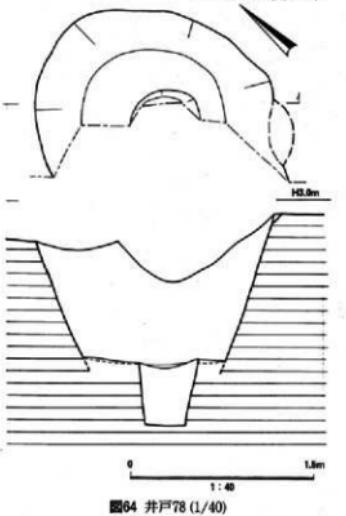


図64 井戸78(1/40)

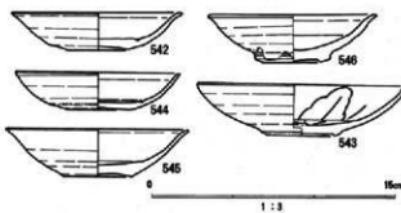


図65 井戸78出土遺物(1/3)

まで施釉し、内底面外線に1圈線を入れ、内側の釉を輪状に搔き取る(D VII類)。540は太い玉縁口縁をもち、外面は体部半ばまで施釉する。口縁近くの内面では釉垂れが顕著である。釉は細かく発泡する(D IV類)。

井戸78(図63・64)

1 A区、整地層下で検出した井戸である。土壤62-64と重複して古い。掘型の径1.8m、井戸側は桶だが、涌水点近くにごく一部遺存したのみで詳細は不明。痕跡の径で0.5mを測る。標高1.1mの位置で涌水点となる。涌水点近くでは黒褐色粘土が堆積する。

出土遺物(図65) 掘型埋土からコンテナ1/10ほどが、井戸側覆土からはごく少量が出土した。掘型出土土器のうち2/5は土師器で糸切底杯、麓切り皿等が混じる。また、古墳時代から古代にかけての土師器もあり、回転箋磨きを施す壺、高台壺もある。陶磁器は2/5を占め、その半ば以上は白磁でとくに平底の皿が多い。陶器無頬壺、捏鉢も含まれる。残りは須恵器で奈良時代の高台壺、壺蓋がある。

井戸側内から出土した資料は細片で、磨耗が著しい。土師器壺、白磁端反碗、陶器がある。

542~546は白磁皿で、掘型埋土から出土した。542・544・545は上げ底気味の平底で、内底面外線に1圈線を入れる。底部以外の全面に施釉される。口縁が外反する542・545と、内湾気味の544とがある(D V類)。546はごく低い高台をもち、釉は高台近くの体部下半に及ぶ(D II類)。543はわずかな高台状の張出をもち、その位置まで施釉する(D III類?)。

溝80(図57・66)

1 A区で検出した。溝55・溝85と重複し、溝55より古く、溝85より新しい。大部分は溝55により掘り替えられて残らないが、遺存する部分からすると断面形が逆台形状を呈し幅1.4m、深さ1.2mを測る。覆土は黒褐色砂である。

図66 溝80(北西から)



図67 溝85(西から)



図68 1区北壁土層断面(1/40)

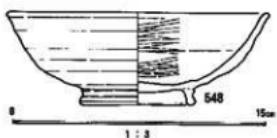


図69 遺構84出土遺物(1/3)

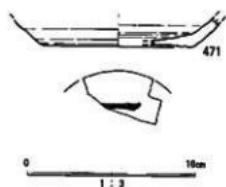


図70 溝85出土遺物(1/3)

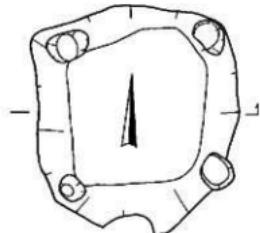


図71 土壙111(1/40)

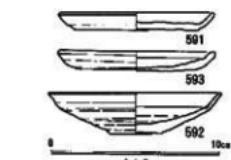


図72 土壙111出土遺物(1/3)

出土遺物 ごく散漫に少量出土した。細片の土器片で土師器丸底坏、窯道具がある。

遺構84(図5・67・68)

1A区北端で検出した。溝55はかと重複し、それより古い。溝の北側のみに遺存して、断面では白砂と明褐色砂薄層の互層となっている。上面が水平で非常に硬い。路面あるいは三和土と思われるが平面の広がりがなく、判断できない。厚さ0.2mほどで、海側へ緩く傾斜する旧表土かとおもわれる黒褐色砂層を覆っている。調査区北壁では溝との関係が不明確だが、東壁では溝85を覆い溝55、溝80に切られて南側への広がりは不明である。

出土遺物(図68) ごく少量出土した。土師器のはかに瓦器碗、白磁碗(DIV類)がある。

548は土師器高台付碗である。内面を箇磨きする。口径15.5cm、高台径6.6cm、器高5.6cm。

溝85(図5・67・68)

1A区で検出した。溝80、遺構84と重複し、それより古い。溝55・溝80と異なり、壁の傾斜がごく緩く断面逆台形となり、調査面での幅3.4m、深さ0.9mを測る。覆土は暗褐色砂で、上位の溝とは時間的な差があることが考えられる。南側に続く地山の傾斜面も本遺構の一部である可能性がある。

出土遺物(図70) ごく散漫に少量出土した。

471は須恵器坏である。底径9.0cm、外底面に墨書きが残る。「一」がみえる。

土壙111(図71・73)

2区で検出した。平面形が不整な隅円方形、断面逆台形状の土壙である。底面近くの四隅に対角線方向を向いた小穴がある。柱穴の可能性を考えたが、柱痕などは確認できなかった。一边が1.6m、深さ1.0mを測る。覆土の上半部は黒褐色粘質土の縞状堆積、下部は暗褐色砂が一様に堆積している。

出土遺物(図73) 覆土中から総量でコンテナ1箱ほど出土した。1/4が土師器坏皿でとくに皿の遺存が良好である。坏は大形、糸切底で板目を残す。細片で全形は不明。皿も糸切底で板目を残す。陶磁器は2/4を占め、小形容器では碗が顕著である。青磁は少數だが、龍泉窯系青磁碗(DVI類)がある。白磁は玉縁の碗が顕著である(DIV類)が、状態のよいものは底部破片が多い。陶器にはH C群の捏鉢、H A群の盤・蓋等がある。残りは瓦、奈良時代の須

図73 土壌111(東から)



図74 土壌127(南東から)

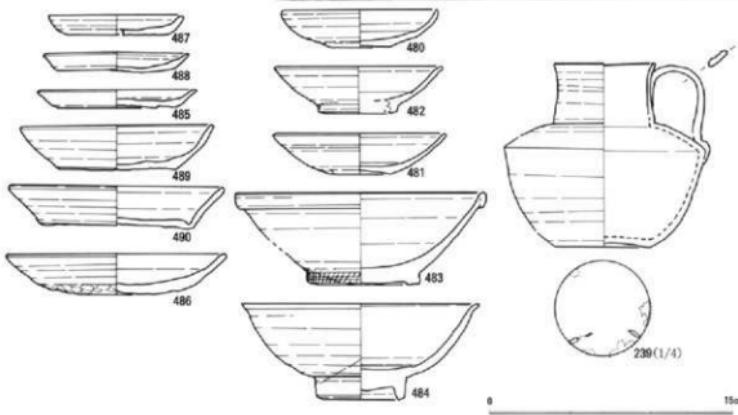


図75 土壌127出土遺物(1/3, 1/4)

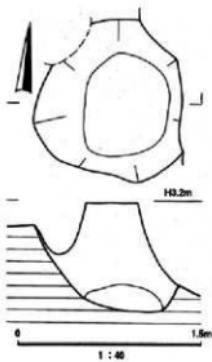


図76 土壌127(1/40)

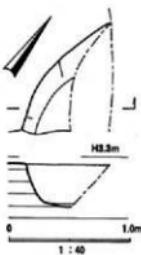


図77 土壌128(1/40)

遺器・土師器、土製品として土錐、滑石製品等である。

591・593は土師器系切底皿である。ともに糸切底で板目を残す。法量は口径9.1~9.2、底径7.4~7.5、器高1.1と同規格の資料である。

592は白磁皿である。上げ底気味の平底で、外面の体部半ばまで施釉される。口縁近くの屈曲部内面に1圈線を入れる(D VII類?)。

土壌127(図74・75)

2区で検出した。平面形が不整な円形状、断面は逆台形状となる土壌で底面の凹凸がある。径が1.3m、深さ0.9mを測る。覆土は上部が黒褐色粘質土、下部が砂質土となる。

出土遺物(図76) 遺物は覆土中から比較的密に出土しコンテナ1箱ほどの分量となった。総量の3/10は籠切り底・糸切底の坏皿で、細片～小破片が主であるが接合資料も混じる。坏の口径は余り大きくない。陶器類は土師器坏皿類よりも多く5/10程の分量がある。このうち1/3が中形か大形の陶器類で残りが小形の容器類である。その大部分が白磁の碗・皿細片である。天目釉碗が僅かに混じる。中～大形の陶器は捏鉢、盤があるほかに、水注が出土した。

487・488・485は土師器皿である。487・488は糸切底で488の底部には板目が残る。485は籠切り底。法量は口径8.4~10.0、底径6.0~7.4、器高1.1~1.2となる。

490・486は土師器坏である。490は糸切底、486は籠切り底で丸底に整形している。法量は490が口径13.2cm、底径9.8cm、器高2.6cm、489が口径13.5cm、器高2.5cmを測る。

480・482・481は白磁皿である。480・481は上げ底気味の平底で底部近くの体部外面まで施釉される(D VI類)。481は低い高台を割り出す。釉は外面体部下半、一部は高台外面に及ぶ(D II類)。

483・484は白磁碗である。483は大きな玉縁をもち、高台を僅かに削り出し底部は厚い。釉は外面体部下半に及ぶ(D IV類)。484は高台を高く削り出し、釉は外面体部下半から高台に及ぶ。口縁は外反し内底面外縁に1圈線を入れる(D V類)。

239は水注(褐釉陶器?)である。注口部と底部の一部を欠いたほかは、形状を保って出土した底部はやや上げ底気味の平底で、胴部は中位以下を籠削り調整し、上部は稜を成して



図78 土壌128・131(北東から)

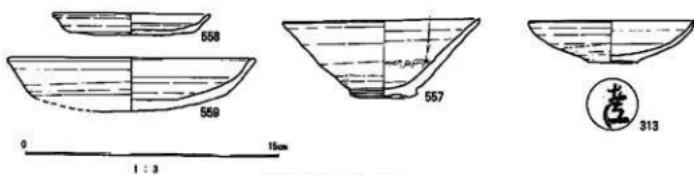


図79 土壌128出土遺物 (1/3)

内方に屈曲する。頸部は筒状に立ち上がり、そのまま口縁となる。口縁端は内外面と稜を成した平坦面となる。把手の断面は偏平で、外面に凹線が2条走る。全面に施釉される。釉は薄く掛かり、褐色ないし暗赤褐色に発色するが、当初からのものかあるいは被熱による変化か判断しがたい。口径8.0cm、胴部最大径16.6cm、底径7.8cm、器高15.1cmを測る。

土壌128(図77・78)

2区で検出した。平面形が円形状、断面は逆台形状となる土壌で、一部が遺存する。深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

出土遺物(図79) 覆土中から少量出土したなかに大破片、全形を復元できる資料がある。陶磁器は図示するほかに、白磁碗で口縁が玉縁、端反のもの、大形甕などがある。

558は土師器箆切底皿である。底面に板目を残し、口径9.4cm、底径7.5cm、器高1.2cmを測る。

559は土師器環である。底面を丸く押し出すが、箆切りの痕跡、板目が残る。口径14.6cm、底径11.8cm、器高3.2cmを測る。内外面の一部が黒化する。

557は天目釉碗である。高台は僅か削り出し、削りも雑で不整な形状を呈す。釉は黒色で外面の高台近くまで施される。口径11.7cm、高台径3.9cm、器高4.7cmを測る。

313は白磁皿である。上げ底気味の平底で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。釉は外表面の体部半ばに及ぶ。体部中位の内面に1周線を入れる(DIV類)。

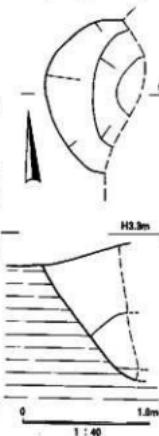


図80 土壌131 (1/40)

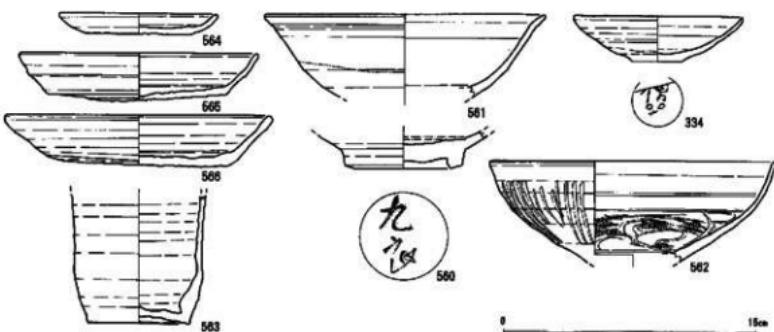
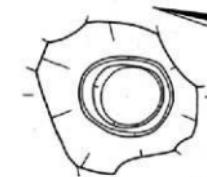


図81 土壌131出土遺物 (1/3)



土壤131(図78・80)

2区で検出した。造構91に重複して古く、ごく一部が遺存する土壤である。平面形は円形状、断面逆台形状となる土壤である。底面の凹凸がある。径は1.2m、深さ1.1mを測る。覆土は上部が黒褐色砂、下部では黒褐色粘土に黄褐色粘土塊が混じり、土壤100と似たような性状を呈す。

出土遺物(図81) 覆土中から細片～小破片の資料が出土したほかに下部で、完形土器がまとまって出土した。総量はコンテナ1/10ほどの量となる。1/4が土師器環皿類で籠切り底、糸切底がある。残りは陶磁器で殆どが細片となっている。白磁碗・皿、青磁碗がある。陶器には小形壺、捏鉢がある。荒い叩き目の瓦も細片で出土している。

564は土師器糸切底皿である。口径9.4cm、底径6.2cm、器高1.3cm

565・566は土師器環である。565は糸切底で口径14.2cm、底径10.6cm、器高2.8cm。566は籠切り底で板目を残す。口径15.4cm、底径10.8cm、器高3.0cm。

334は白磁皿である。上げ底気味の平底で、口縁が内湾気味に立ち上がる。釉は外面の体部半ばまで施す。体部中位内面に1回輪を入れる(D IV類)。外底面に墨書が残る。2文字あるが判読できない。

561・567は白磁碗である。561は上半部の破片で口縁部が外反する。釉が外面の体部中位まで施される。口径16.5cm。567は底部破片で内底面外縁を輪状に掻き取る(D VII類)。外底面に墨書が残る。「九口」か。

562は同安窯系青磁碗で、底部を欠く資料である。外面に荒い櫛歯による条線、内面に櫛・籠状工具による花文を描く(D III類)。

563は陶器壺下半部破片である。台に押しつけて整形した上げ底状の底部をもち、体部器壁が薄い。外面は不整な撫で調整を行う。底径6.0cm、備前系陶器か。

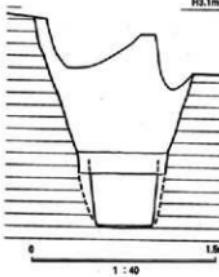


図82 造構133(1/40)



図83 造構133(南から)

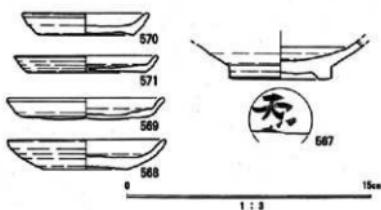


図84 造構133出土遺物(1/3)

井戸133(図82・83)

2区で検出した。平面形は円形状、断面形は深い逆台形状となる。井戸側の痕跡が残り、半ばから底面まで続く。径は1.2m、深さ1.7mを測る。

底面の高さは標高1.3mで地下水位には達していない。覆土は黒褐色粘質土である。

出土遺物(図84) 覆土中からコンテナ1/10ほどの量出土した。1/2は土師器壺皿で、殆どが細片、器表の磨耗がみられる。陶磁器も細片で白磁に玉縁・端反口縁の碗がある。井戸側覆土からも玉縁口縁の碗細片が出土している。

568~571は土師器糸切底皿である。何れも糸切底で、法量は口径7.6~9.5cm、底径5.4~7.6cm、器高1.1~1.8cmである。

567は白磁碗である。底部破片で、内底面外縁を輪状に搔き取る(D型類)。外底面に墨書が残る。「九□」か。

3 墨書き土器(図85)

報告した遺構以外から出土した墨書き土器を出土位置ごとに集成する。擾乱2(325)、土壤25(306)、土壤51(307)、擾乱88(329)、土壤91(310・311・312)、土壤94(332・333)、トレンチ13(304・305)、トレンチ68(309)、1A区(301・335・337・316・338・336・314)、2区(323)。

土壤(擾乱)2 325は白磁碗底部である。内底面に櫛描きで施文する。外底面に墨書が残る。2字あり、「器□」か。

土壤25 306は白磁碗底部である。墨書は外底面に2字あり、「[二]神」か、1字めはごく一部の遺存。

土壤51 307は白磁碗底部である。内底面外縁に1圈線を入れる。高台を浅く削りだす。釉は高台に及ぶ。外底面に墨書が残る。2字あり、「九□」か。

土壤88 329は白磁高台付皿である。体部上部の内面に1圈線を入れる。内底面の釉を搔き取り、目痕が残る。外底面に墨書が残るがごく一部の遺存である。

土壤91 311は白磁碗底部である。内底面外縁を輪状に搔き取る。釉が体部下半に及ぶ。外底面に墨書があるが判読できない。312は白磁平底皿底部である。外底面の一部まで釉が及ぶ。外底面に花押とおもわれる墨書き1字が残る。310は白磁碗底部で内底面外縁を輪状に搔き取る。外底面に墨書が残る。2字あり、「九□」か。

土壤94 332は白磁高台付皿底部である。内底面に櫛描きで花文を描く。外底面に墨書が残る。2字あり、「大□」、2字目は花押であろうか。

トレンチ 304は天目釉陶器碗で、外底面に墨書が残る。花押か。305は白磁碗底部である。内底面に櫛描文様を施文する。外底面に2字墨書が残る。「玉□」と読み、2字目は花押か。

1区 301は整地層上部出土の白磁碗底部。外底面に墨書が残る。1字で、「朱」。335は白磁平底皿で整地層出土。2字とみえ、「僧□」か。337は白磁碗底部で、整地層上出土。外底面に墨書が残る。花押か。316は白磁碗底部で整地層出土。外底面に墨書が残る。「金ヶ良」の2字である。338は白磁平底皿底部で、整地層下から出土した。外底面に墨書が残る。1字で花押か。336は須恵器壺で整地層出土。外底面に墨書が2字以上残るが判読できない。314は確認面出土の土師器壺で、体部の内外面、内底面全体に墨書が残る。

2区 323は白磁碗底部である。外底面に墨書が残る。「黄」か。

以上、墨書きは第79次地点に近接することもある、その出土例にみられる「九」で始まる2字の資料が3例出土している(図85掲載の他に井戸133出土白磁碗560)。また、土壤62出土白磁碗(302)の花押も第79次地点に類似がある。

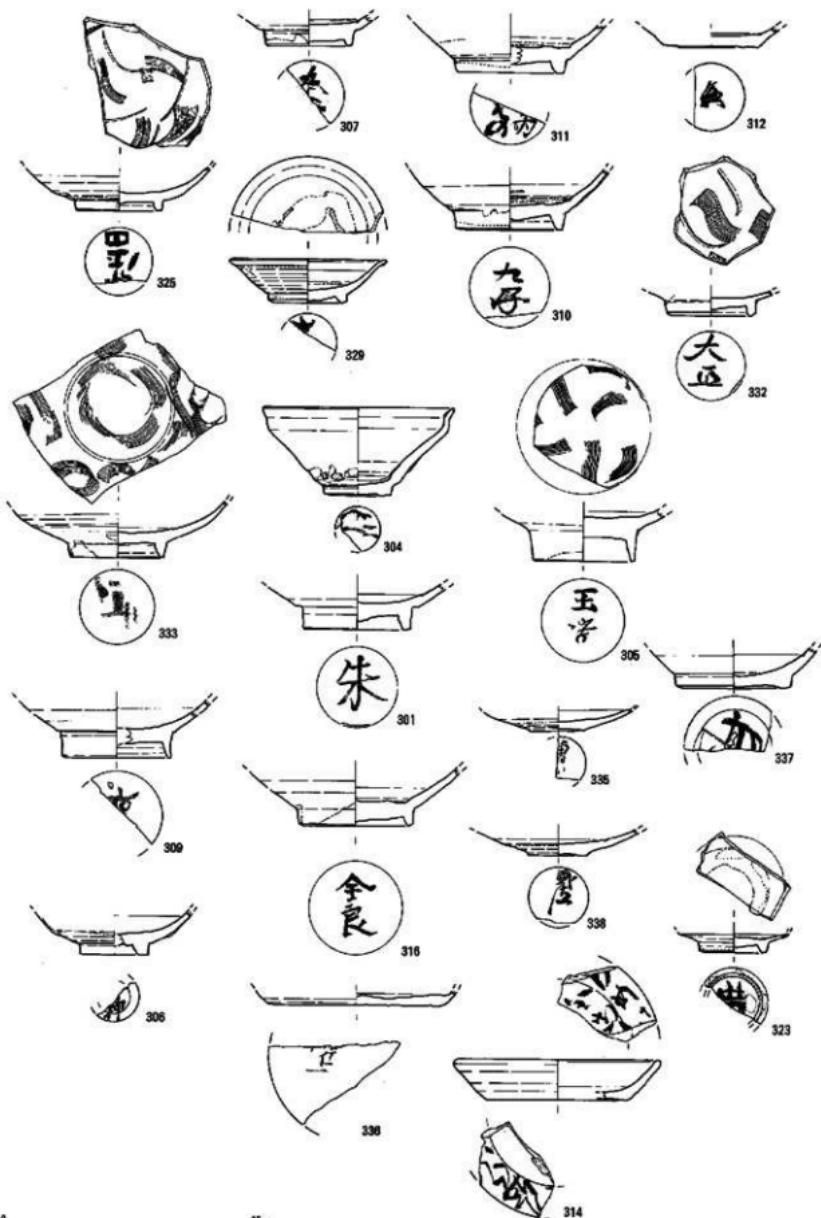


圖85 墓葬土器 (1/3)

III おわりに

調査区で検出した遺構出土土器の大部分は土師器壺皿である。その大半は系切底で、これに窓切り底が組合わざるかたちで出土している。陶磁器は白磁碗・皿が殆どを占め、青磁碗その他が少數加わる例がある。陶磁器と土師器の組み合わせ、上師器の法量からみた年代は12世紀中頃～13世紀中頃に納まる遺構が多く、一部が12世紀初頭、13世紀後半に位置するとおもわれる。以下に土師器壺皿の法量と、共伴する小形陶磁器の一覧を示す。

遺構番号	窓切り底・系切底・上師器の法量(升)	平均			底部形状	陶磁器
		口径	底径	高さ		
1面遺構						
8 环	最大 134 90 27 最小 123 75 26	124	85	27	系切底	白磁皿(DV)
9 环	最大 96 91 12 最小 87 20 10	91	77	11	系切底	白磁皿(DV)、藍灰釉系青磁碗(DI)等
环	最大 154 110 32 最小 125 92 25	144	102	28	系切底	
15 环(窓切)	最大 90 70 12 最小 83 65 13	86	63	13	系切底	白磁碗(DV)
环	最大 134 102 37 最小 128 85 23	131	94	25	系切底	
19 环	最大 96 76 14 最小 83 76 13	93	76	13	系切底	白磁皿(DV)
环	最大 150 100 36 最小 147 95 27	145	96	28	系切底	蓝灰釉系青磁、青灰釉系青磁
24 环(窓切)	最大 92 72 13 最小 80 72 12	91	72	13	系切底	白磁碗(DV)・盤(DI)、藍灰釉系青磁碗(DI・直筒)・小口(DII)等
26 环	最大 92 81 13 最小 80 62 10	87	69	12	系切底	白磁碗
环	最大 158 107 34 最小 145 90 27	152	101	30	系切底	
35 环(窓切、片付)	最大 95 72 12 最小 85 68 11	89	70	12	系切底	白磁碗(DV)
37 环	最大 155 118 39 最小 141 85 28	149	106	30	系切底	白磁碗(DV)、藍灰釉系青磁碗(DI)
43 环	最大 98 71 15 最小 85 63 11	89	69	15	系切底	白磁碗、藍灰釉系青磁碗(DI)
环	最大 145 110 31 最小 140 94 28	143	105	26	系切底	
52 环	最大 99 72 12 最小 87 67 8	89	69	10	系切底	白磁碗、藍灰釉系青磁碗(DI)
环	最大 153 125 37 最小 133 84 24	140	94	33	系切底	
89 环-直(系切底、片付)					系切底	
99 环	最大 91 67 20 最小 68 45 14	91	54	17	系切底	
环	最大 154 120 38 最小 118 88 24	125	86	27	系切底	
100 环	最大 95 61 14 最小 85 44 12	93	73	13	系切底	白磁碗(DV-V・直筒)・直(DI)等、青灰釉系青磁(DI)
环	最大 160 115 35 最小 153 108 29	156	111	31		
121 环	最大 134 80 29 最小 118 50 25	121	80	27	系切底	白磁碗、青灰釉系青磁碗(DI)
124 56-直(系切底、片付)					系切底	白磁碗
2面遺構						
55 环	最大 100 78 18 最小 85 68 10	92	70	13	窓切り底・系切底(少數)	白磁碗(DV)等、藍灰釉系青磁碗(DI)
55 环						
62 2-環(窓切り底・系切底、片付)					窓切り底・系切底	白磁碗(DV)・直、青灰釉系青磁
64 2-環(系切底、片付)					系切底	白磁碗(DV-V・直筒)・直、青灰釉系青磁
78 3-環(窓切り底・系切底、片付)					窓切り底・系切底	白磁碗(DV-B-V)・直
84						白磁碗(DV)
85 5-環(片付)						
111 环	最大 92 75 11 最小 91 74 11	92	75	11	系切底	白磁碗(DV)等、藍灰釉系青磁碗(DI)
127 环	最大 100 75 15 最小 84 60 11	91	70	12	窓切り底・系切底	白磁碗(DV-V)・直(DI-V)
环	最大 132 98 26 最小 120 73 26	126	86	27	窓切り底・系切底	
128 环(窓切)	最大 94 75 12 最小 84 62 13	92	66	12	窓切り底	白磁碗(DV)・直(DV)
环	最大 154 108 30 最小 142 106 26	148	107	29	窓切り底	白磁碗(DV-V)・直(DV)等、青灰釉系青磁(DI)
133 环	最大 96 76 18 最小 70 51 11	87	65	14	窓切り底・系切底	白磁碗(DV-V)

報告書抄録

ふりがな	はかた 83					
書名	博多 83					
副書名	博多遺跡群第127次調査の概要					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第709集					
編著者名	杉山富雄					
発行機関	福岡市教育委員会					
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667					
発行年月日	2002(平成14)年3月29日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		㎡	調査原因
博多遺跡群	福岡県福岡市 博多区冷泉町	40130	00121	33° 35' 26"	135° 24' 56"	2000.12.4 2001.2.9
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
博多遺跡群	集落	平安時代～鎌 倉時代	土壙44、井戸2、 溝3	白磁を中心とした輸入陶 器、土師器等		

博多 83

—博多遺跡群第127次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第709集

2002年3月29日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 友盟社印刷有限会社
福岡市南区大楠1-26-20